

# 特許検索競技大会2013開催報告

## —特許調査能力評価のフレームワーク確立へ向けて—

Performance report of Patent Information Retrieval Contest 2013

特許検索競技大会 2013 実行委員会委員長 **菅原 好子**

**PROFILE**

1985年4月三井化学（旧三井東圧化学）株式会社入社、知的財産部（特許部）特許調査担当。  
 2007年7月知的財産部情報調査センターユニットリーダー。2012年4月から知的財産部副部長。  
 （対外活動）2001年度日本知的財産協会知的財産情報検索委員会委員長、特許庁（発明協会）JPO/IPR研修講師、  
 INPIT特許検索競技大会実行委員会委員など、知的財産情報関連の各種公的活動に参画。

### 1 はじめに

特許検索競技大会<sup>\*1</sup>は、2013年度から、特許庁の登録調査機関であるIPCC（一般財団法人工業所有権協力センター）が主催<sup>\*2</sup>となり、主催者変更後の最初の大会である特許検索競技大会2013は、それまでのINPIT（独立行政法人工業所有権情報・研修館）の経験<sup>\*3</sup>を活かしつつ、新たな取り組みを導入し開催された。

2013年10月26日（土）の大会当日は、東京会場と大阪会場を合わせて、過去最高の200名超の参加者があり、また、大会出題内容の解説をおこなうフィー

ドバックセミナー（2014年2月21日（金）東京、28日（金）大阪）へも、合計約200名の参加者があり、大会に関するイベントは、成功裏に終了した。

2013年大会の大きな変更点としては、大会参加費を有料としたことが上げられるが、同時に、新たな取り組みとして、①「ベーシックコース」新設（学生は無料）、②認定証交付を実現、③「アドバンストコース」での団体の部新設をした。

このように、特許調査実務能力を評価する大会として、一定の認知を得、さらに、より魅力ある大会へと進化を遂げた特許検索競技大会2013について、その内容と結果の詳細を述べるとともに、大会実行委員会の立場が

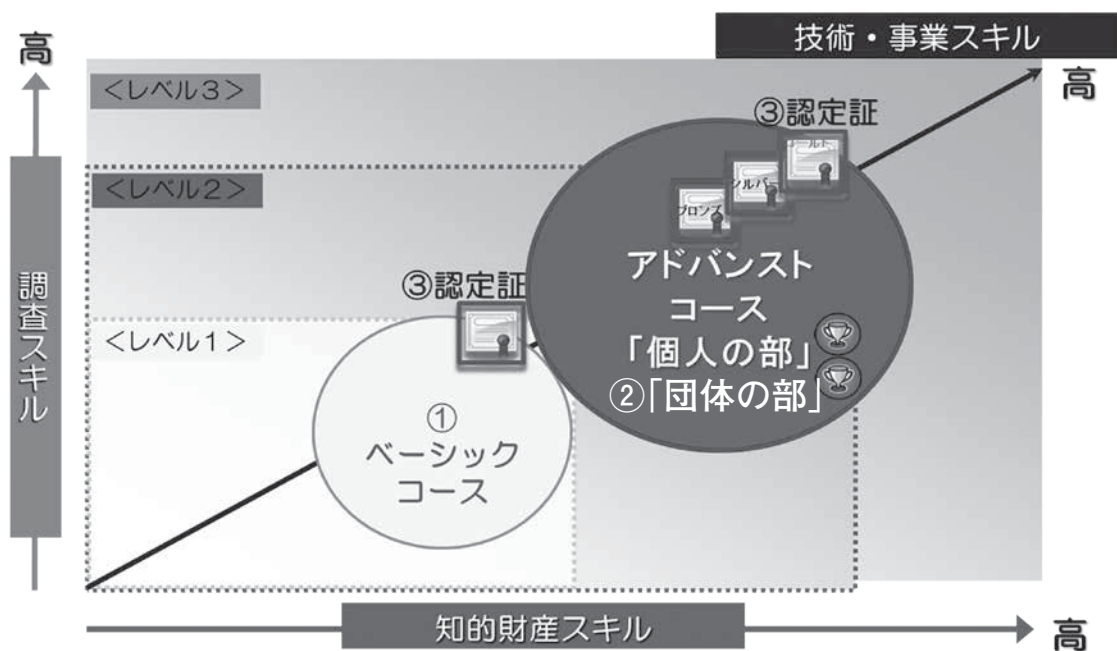


図1 2013大会の施策追加に伴う全体像

ら、特許検索競技大会の果たす役割と特許調査に関連する方々への期待を述べる。

## 2 ベーシックコース

### 2.1 概要

最初の特許検索競技大会は、特許調査を専門とする方々（特許調査従事者）の評価・顕彰を目的として2007年6月関西特許情報センター振興会の創立50周年を記念したイベントとして開催された。その後も、対象者と目的は同じく、大会内容を進化させて開催してきたが、近年では、特許調査の知識・技能の修得を目指している学生や高専生、さらに、企業や研究機関等の研究者も数多く、2013年大会では、その対象者を広げ、普及啓発の裾野を広げることを目的として、「ベーシックコース」を新設した。尚、これに伴い、それまでの特許調査従事者を対象としたものは、「アドバンストコース」と改称した。

「ベーシックコース」は、特許調査の基礎レベル（「特許調査従事者の現状と今後に関する調査研究報告書」（2012年2月INPIT）<sup>4)</sup>のサーチャーレベル1相当）を評価するものとし、調査ツールは「IPDL（特許電子図書館）」の利用のみで、時間は90分とした。

出題内容は、検索の基本的な考え方等、特許調査の基本的能力を評価する出題内容とし、具体的には、

#### 問1 基本知識（選択問題）

発明の定義、IPDLの機能、各種公報の読み方、論理演算、『公報テキスト検索』での検索機能、IPDL経過情報の見方

#### 問2 パテントマップガイダンスを用いた特許分類の調べ方

#### 問3 公報テキスト検索を用いた検索

とした。

### 2.2 結果

2013年度に初めて設けたコースであったことから、参加者は、東京会場、大阪会場合わせて26名と、若干少なめであった。参加者は、主に知的財産を学ぶ大学生、企業や研究機関の研究者であった。以下に、得点結果を

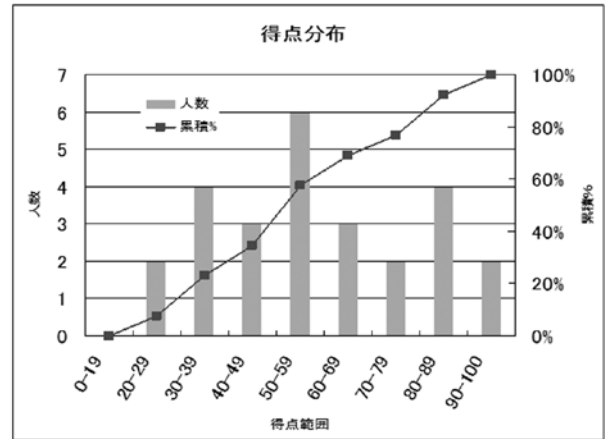


図2 ベーシックコース得点結果

示す。

「ベーシックコース」においても、一定基準以上の得点獲得につき認定証を与えることとし、認定基準は、総合得点70点以上、かつ、各設問の得点が60%以上とした。

この結果、今年度は6名が認定者として表彰された。

## 3 アドバンストコース

これまでの特許調査従事者を対象としたものは、「アドバンストコース」と改称した。「アドバンストコース」では、これまでと同様に、個人の優秀者の表彰を実施するとともに、特許調査能力の到達度に関する客観的な指標を提供するために、一定レベルの結果を得た参加者へ「ゴールド」、「シルバー」、「ブロンズ」の3段階での認定証を交付することとした。

また、特許調査従事者の育成に寄与している会社等機関の取組を支援するため、団体の部の表彰を新設し、上位チームに対して表彰をおこなうこととした。

### 3.1 個人の部

#### 3.1.1 概要

「アドバンストコース」と「ベーシックコース」とを分けたことから、「アドバンストコース」は評価レベルを前出「特許調査従事者の現状と今後に関する調査研究報告書」のサーチャーレベル2相当とし、必要とされるスキルを以下の問題を通して評価した。

問題は、共通問題と①電気分野 ②機械分野 ③化学・



医薬分野の3分野からの選択問題とした。利用可能データベースは、参加者が事前に選択した2つの商用特許検索データベースとIPDL等のインターネット上のオープンなデータベースであり、大会時間は4時間とした。

出題内容は、

問1 共通問題：基本知識と外国特許調査

- (1) 検索戦略・検索式・特許分類・知的財産制度、審査基準・データベース
- (2) 米国特許番号からのパテントファミリー調査、調査結果（US制度・公報番号）の読み方

問2 出願前調査：検索式作成の基本的な能力

- (1) 課題分析、検索戦略、分類選定
- (2) 検索式策定（適正なヒット件数）
- (3) 新規性判断に基づく適切なスクリーニング
- (4) 進歩性否定のためのロジック構築

問3 無効化資料調査：スクリーニング（調査期間および構成要件抽出）

- (1) 無効化資料調査のための調査範囲の正しい理解
- (2) 構成要件の適切な対比と判断

とした。

### 3.1.2 結果

参加者は、総計175名（東京会場125名、大阪会場50名）であり、選択された分野は、電気分野87名、機械分野49名、化学・医薬分野39名であった。

以下に、得点結果を示す。

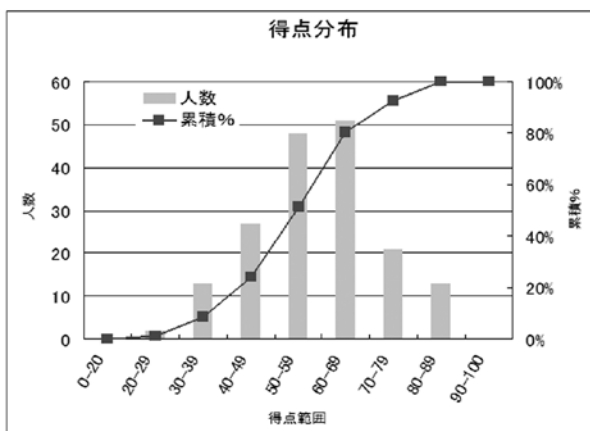


図3 アドバンスコース得点結果

個人の部では、全参加者の中で、最も得点の高かった方を最優秀賞として、表彰式において表彰した。

また、一定レベルの結果を得た参加者へ「ゴールド」、

「シルバー」、「ブロンズ」の3段階での認定証を交付した。

各段階の認定基準は、

ゴールドレベル：合計偏差値65以上、かつ各設問の偏差値55以上

シルバーレベル：合計偏差値60以上、かつ各設問の偏差値50以上

ブロンズレベル：合計偏差値55以上、かつ各設問の偏差値45以上

とした。

この結果、認定者は、

ゴールドレベル：6名（電気4 機械1 化学・医薬1）

シルバーレベル：13名（電気8 機械2 化学・医薬3）

ブロンズレベル：22名（電気8 機械6 化学・医薬8）

であった。

ブロンズレベル認定者およびシルバーレベル認定者には、個人への評価結果報告書送付時に、認定証を入れて報告した。一方、ゴールドレベル認定者には、表彰式において、それぞれに認定証が手渡された。認定者の喜びの表情から、認定証交付の意義は大きいものであると思われる。

## 3.2 団体の部

### 3.2.1 概要

個人の部への参加と同時に、同一組織の3名を1チームとしてエントリーし、3名の総合得点で争う「団体の部」を新設し、上位のチームを表彰することとした。尚、1組織から2チームまで参加可能とした。

これは、特許調査従事者の育成に寄与している会社等機関の取組を支援することと合わせて、ハイパーフォーマーの参加を促す狙いも含まれている。

### 3.2.2 結果

「団体の部」は、2013年大会での初めての試みであったが、16チームの参加があり、審査の結果、上位3チームが表彰された。

表彰式においては、チーム名とその所属組織の公表もあり、個人の部とは異なる、団体としての表彰の意義も大きいと思われた。

## 4 特許検索競技大会の果たす役割

特許検索競技大会の目的は、我が国の研究開発の効率を高めて、イノベーションを促進するために

- ・ 特許情報検索能力の客観的評価を行い、検索技術者の技術向上に資する
- ・ 検索技術者の意識高揚を図る
- ・ 検索技術者の育成に寄与している会社等機関の取組を支援する

ことにある。

本大会では、これらを実現するために、単に大会を開催することだけではなく、以下に示す一連のサイクルを回すことを重要視している。

特許検索競技大会は、大会開催後、参加者全員に、「個人評価結果」である「評価結果報告書」を送付している。これは、その実力を「見える化」するためのものである。

その結果から、どこができなかったのか、といった「気づき」が生まれ、これを踏まえた上で、大会の問題解説である「フィードバックセミナー」を開催し、わからなかった点を解決し、体系的な知見を習得してもらう場としている。

2013大会から、本大会の参加費は有料化されたが、

参加費は、大会とフィードバックセミナーのセットでの料金となっており、これは、両方に参加していただくことが大切であるとの思いからである。

この後、セミナーで得たものを踏まえ、スキル向上のための「思考&行動」に移す動機付けが生まれ、各人が、テキスト学習や、各種講習会への参加、加えて、実務での研鑽を積んでいくことが期待される。

また、テキスト学習のひとつとして、特許検索競技大会の過去問集<sup>15</sup>が Japio（一般財団法人日本特許情報機構）で発行されているので、参考にさせていただくとよいと思われる。

この上で、新たな、「目標・実力評価」のため、次年度の特許検索競技大会に挑戦していくといった一連のサイクルを回すことが、特許検索実務能力の向上にとって、重要である。

さらに、本大会では、個人の能力評価が可能となることにより、認定証の交付や個人・団体での表彰によって、インセンティブ向上やモチベーションアップ、そして、組織などにおいては、職務上の評価につなげることも可能となる。

このように、特許検索競技大会は、これら実務能力向上のサイクルの基点としての役割を果たすことを目指している。

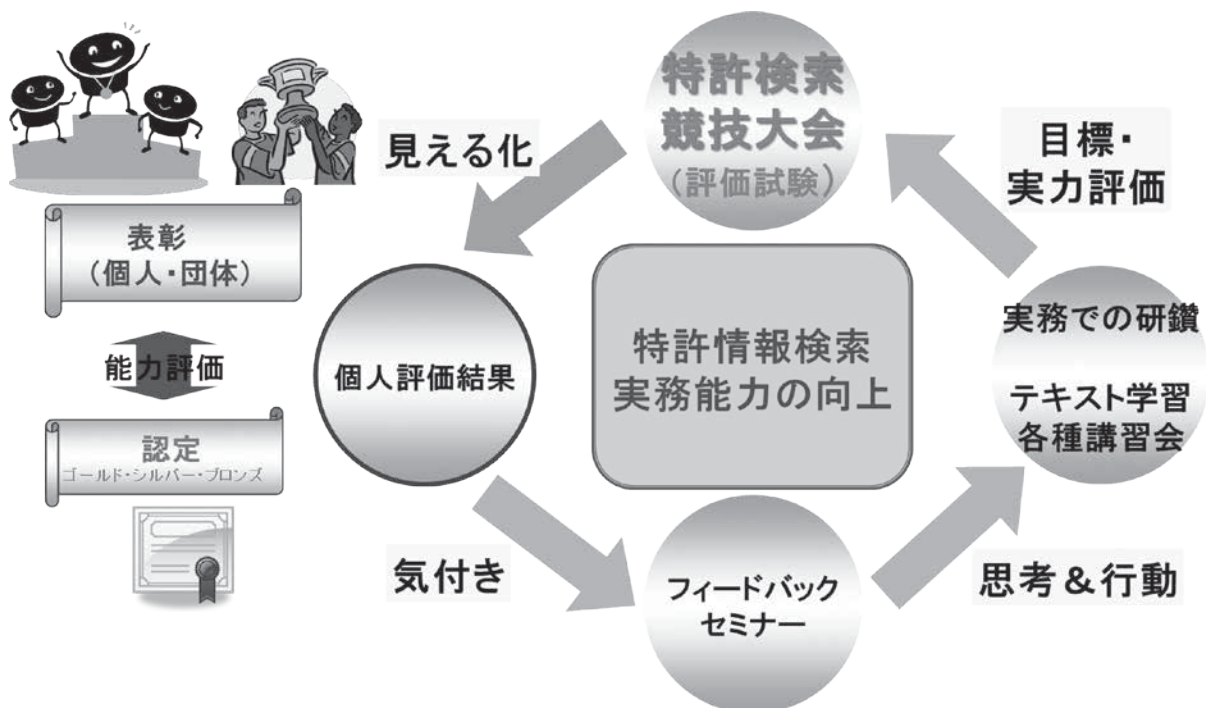


図4 特許検索競技大会の果たす役割



2013大会では、3つの追加した施策の結果、全体としてのフレームワークが確立し、大会の目指すべき方向がより明確になったものと思う。

企業のグローバル化や新規分野への参入など、特許調査に求められることも大きく、重要な意思決定のための調査が増えてきていることと思う。特許調査に関連する方々には、是非、自らを高め、組織を活性化して、大事な局面で力を発揮していただきたい。

このために、特許検索競技大会の一連のサイクルを、是非、有効活用していただければと思う。

## 5 おわりに

大会開催前日の2013年10月25日(金)、2つの台風、27号及び28号が日本列島の西から東に向けて横断し、開催が危ぶまれたが、参加者および実行委員会並びに事務局のみなさまの熱い思いが台風を吹き飛ばし、大会が予定通り開催できたことは、本当に幸いなことであった。

大会が開催できたからこそ、表彰者や認定者が生まれ、その結果をそれぞれの場所で活かした活動がされているものと思う。

また、今回、認定や表彰を受けられなかった方々や、狙っていた認定レベルに到達しなかった方々にとって、次の目標に向けて、新たなサイクルが回り始めているものと思う。

特許検索競技大会は、そのフレームワークがほぼ完成し、その「定着」に向けて、新たなスタートを切っているところである。

特許調査従事者および特許調査に興味のある学生や研究・開発者をはじめとした様々な方々にとって、実務能力評価とインセンティブ向上のため、今後とも、信頼できる大会であり続けるよう、主催者であるIPCC及び共催者、後援者、さらに、データベースを無償で提供いただいている協賛プロバイダーの方々、そして、実行委員会の委員の皆様とともに、努力と改善を続けていき、大会のより一層の発展を目指していきたい。

## 引用文献等

- \*1 過去の特許検索競技大会の紹介記事
  - ・ Japio YEAR BOOK 2009 pp100-103
  - ・ Japio YEAR BOOK 2010 pp118-123
  - ・ Japio YEAR BOOK 2013 pp138-141
- \*2 特許検索競技大会 2013 (IPCC Web Site)  
<http://www.ipcc.or.jp/contest/2013/index.html>
- \*3 特許検索競技大会 2012 (INPIT Web Site)  
<http://www.inpit.go.jp/jinzai/kensakutaikai/news2012/index.html>
- \*4 特許調査従事者の現状と今後に関する調査研究報告書 (INPIT Web Site)  
<http://www.inpit.go.jp/content/100485408.pdf>
- \*5 特許検索競技大会 過去問集 (Japio Web Site)  
[http://www.japio.or.jp/service/service04\\_05.html](http://www.japio.or.jp/service/service04_05.html)



